

## グラスミアの位置と意味

—— ド・クインシー、『阿片常用者の告白』(1821)におけるワーズワスと阿片 ——

小林 徹

外国文化研究室

## Place and Meaning of Grasmere :

Wordsworth and Opium in De Quincey's *Confessions of an English Opium-Eater* (1821)

Toru Kobayashi

World Civilizations

### Abstract

Although it is true that Thomas De Quincey records his opium-related extraordinary experiences in the *Confessions of an English Opium-Eater* (1821), the analysis of this work's narrative structure, coupled with some considerations of the historical relationship between the author and his idol, William Wordsworth, show that this is not the only theme presented. Structurally, the *Confessions* has the focal point through which its narrative sequence develops, —Grasmere— the place which, according to the biographical facts of the author, is also the center in the actual course of his life as an opium addict and would-be member of the poet's circle. When reconsidered in the light of the double significance of Grasmere, the *Confessions* can be interpreted not only as De Quincey's personal account of his opium use, but also as the more genuine autobiography.

### I

Thomas De Quincey による *Confessions of an English Opium-Eater* (1821) は、発表直後から物議をかもし作品であった。理由は至って明瞭、作品では阿片にまつわる事柄が扱われていたからである。阿片自体は当時、鎮痛を初めとする万能薬として社会に既に定着していたために(Lomax 167-76;

Berridge 437-61)、取り立てて目を引く題材ではなかった。読者の関心を集めたのは、作品に描かれていた、身体というよりむしろ精神に及ぼすその効果であった。そうしたことを如実に物語るエピソードがある。作品が出回って後、阿片を試す人が増加したとの報告がなされた。つまり人々は、著者が作品のなかで語っていた並外れた経験、すなわち阿片がもたらす官能的な喜び、そして恐ろしくも魅惑的な夢のヴィジョンに引き寄せられて、その薬剤に赴いたのであった(Hayter 104-06; McDonagh 171-73; Clej viii-ix)。

それでは『阿片常用者の告白』には、阿片のことしか語られていないかといえば、そうではないだろう。この作品はそれ以上に多元的であり、すなわち阿片を超える主題もそこにはあると思われるのだ。そしてそのことは逆説的にも、作品では直接語られていない事柄に注意を向けることにより、見出せるのである。作品において述べられていない事柄、その最たるものは、William Wordsworthにかかわることである。なお作品では著者自身の過去が大きく取り上げられているだけに、これは奇異である以上に、一つの問題でもある。それからさらに注目したいのは、作品の深層にある物語構造である。これらについては、両者は照応関係にある、または前者が後者に意味を与えると考えることができる。そしてこうした点をふまえると、『阿片常用者の告白』は、端的にいうと、グラスミアという地をめぐるド・クインシーの半生を見事に物語っていたことに気付くだろう。しかもその半生とは、従来作品の主題とみなされてきた事柄、すなわち彼の阿片体験とも明らかに結び付いているのである。従って要するにこの作品は、阿片に関する著者の記録であるのはもとより、文字通り彼の生の有様を物語る、より全体的な自伝としても成立していると読めるのだ。以下作品の物語構造の分析から始めたい。

## II

『阿片常用者の告白』は六つのセクションからなる。著者による表記をそのまま用いると、それらは順番通りに、“TO THE READER”と始められる箇所、“Preliminary Confessions”、“Part II”、“The Pleasures of Opium”、“Introduction to the Pains of Opium”、それから“The Pains of Opium”である。そしてこれらは、大方の表題が示唆するように、阿片を主題として区分され、整序されたものと考えてよい。一言でいうと、作品では、阿片効果の苦痛が語られる場所をクライマックスとする、著者ド・クインシーが阿片飲用に至るまでの経緯とその実体験の様子が描かれているのである。ところがこうした内容上の単純さとは裏腹に、作品の展開それ自体はむしろ複雑な様相を帯びているといえる。顕著なところでは、阿片飲用の経緯が辿られているとしても、それは年代記的なかたちには仕上がってはいない。つまり出来事が語られる順序は、必ずしもそれが実際に生じた時間経過に沿ってはいないのだ。たとえば、“Preliminary Confessions”において、1813年、ド・クインシー28歳の頃の阿片飲用の様子が語られたかと思えば、物語の進行上その後にくる“The Pleasures of Opium”に至ってから、1804年の彼の最初の阿片体験が紹介されるという具合である。もっともこれには理由

がある。このような語りになったのも、彼が作品のなかで自らの阿片飲用に対する自己弁護を行っているからであり、つまりそれは、作品の出だしのところで、自分の阿片飲用のきっかけも目的も断じて、その薬剤がもたらす快楽を求めてではないことを、予め読者に植え付けておこうとする、彼の戦略に発していたのである。また後にも確かめるように、著者が取り上げる様々な話題や過去の出来事のあいだには、具体的にはその記述に要する語数というかたちであらわれているのだが、彼がそれらの各々に想定している意義の軽重の差が明らかにあり、そのことも物語が複雑さを呈する一因となっている。

そこで具体的な年月というより、語られる出来事が実際に起きた、あるいは選ばれた話題が依拠している時期に着目すると、『阿片常用者の告白』は比較的明解な物語構造を有していることがわかってくる。ここでいう時期とは、以下の三つに区分されるものである。まずド・クインシーがこの作品を書いている現在、つまり1821年後半という時点。それから彼の幼年時代から大学生時代に相当する、1790年代初頭から1800年代初頭までの期間。最後は、大学を離れて、彼がこの作品に着手するまでの時期であり、それは、彼に関する伝記的事実を参照すると、端的に、彼がグラスミアを主な本拠地として生活していた頃、すなわち1808年から1821年前半までの時期に当たる(Lindop 156-246)。そして作品の物語構造は、それがこれら三種の時期から構成されているとみなすとき、明確な輪郭をもつものとして立ちあらわれてくるのだ。これ以降、そのことを検証する。

『阿片常用者の告白』は、著者が読者に直接訴える言葉から始まる。ド・クインシーは、これから述べようとする“the record of a remarkable period in my life”(1)が、他の阿片飲用者にとり有益であることを強調し、そしてその裏返しとして、自らのこれまでの人生は“the life of a philosopher”(2)であり、また以前から“a religious zeal”(2)をもち行ってきた、阿片を絶とうとする試みからも、自分は必ずしも阿片の快楽に惑溺するたぐいの罪深い輩ではないと主張する。つまり彼はここで、自分自身もこの作品もともに道徳性を有するものとしてあることを読者に知らしめようとするのだ。そして本章での関心からすると、こうしたド・クインシーの語りは、彼がこの作品を書いている現在に根差しているといえる。ここで語られているのは、今読者の目の前にあるこの書物であり、そして現在の著者自身の姿なのである。

そして次に“Preliminary Confessions”という新しい表題のもと、「その記録」が紹介される。冒頭ド・クインシーは、この箇所について、“introductory narrative of the youthful adventures which laid the foundation of the writer’s habit of opium-eating in after-life”(4)と述べ、すなわちそこでは彼の過去が語られることになる。最初に示されるのは、彼が“a regular opium-eater”(6)になってしまった事情である。当時彼は28歳、その伝記によると、場所はグラスミアにおいてであった(Lindop 201-03)。作品ではそのあたりは、以下のように述べられている。

It was not for the purpose of creating pleasure, but of mitigating pain in the severest degree, that I first began to use opium as an article of daily diet. In the twenty-eighth year

of my age, a most painful affection of the stomach, which I had first experienced about ten years before, attacked me in great strength. (6)

それから物語は、“the youthful sufferings, which first produced this derangement of the stomach” (6) を辿り始める。つまりこれより、自伝というこの作品が一方で根差す文学ジャンルの約束事になり、彼の過去が本格的に語り出されるのである。手短かに述べると、著者7歳の時の父の死から説き起こされ、様々な学校へ通ったこと、しかし最後の所では脱走をはかり、ウェールズ、ロンドンを放浪したことが伝えられる。なかでも紙数が費やされるのがロンドン滞在時の様子である。ド・クインシーはそれ以前から赤貧状態にあり、そのため体調はひどく悪化し、絶えず痛みを苛まれていた。しかし彼に手を差し伸べる人がなかったわけではなく、また少女娼婦 Ann との温かな心の交流もあった。そしてこのセクションは、彼がその後首都を離れ、オックスフォード大学に入学したこと、それから時折ロンドンを訪れてはアンの消息をたずねるが、無駄だったことが述べられて終わる。以上が概略であり、そこでは先にもふれたように、必ずしも時間軸に則り出来事が紹介されてはいない。そして確認しておくのは、“Preliminary Confessions” は二つの時期を扱っていたこと、それから語りの進行は、いわばグラスミア時代から、それより古い過去へと遡行していたことの二点である。

“Part II” において読者は、既知の話題、そして既に紹介されている時期に戻ることになる。同様に舞台も再びグラスミアである。彼はロンドン滞在中にもその地に強く憧れていたらしい(35)。そして “second birth of my sufferings”(35) が生じたのが、正にその谷においてであったのだ。彼は毎夜、“visions as ugly, and as ghastly phantoms as ever haunted the couch of an Orestes”(35) に襲われ、眠りはもはや “my bitterest scourge”(35) 以外のなにもものでもなかったという。ところが彼には支えてくれる人がおり、それは、作品では明示されないが、彼の後の妻、Margaret Simpson であった。そしてこの分量はきわめて少ない “Part II” においても、物語は二種類の時期に渡る。すなわち語りはさらに現在の彼の様子にも及ぶのだ。その話題に移ると、開口一番、ド・クインシーは、上述のような苦しみは去ったと述べる。それからその彼は今、マーガレットをグラスミアに残し、首都におり、“Oh, that I had the wings of a dove”(37) といったその言葉が如実に示すように、孤独の只中にある。

そして『阿片常用者の告白』が阿片にまつわる書物だとするなら、むしろ次からが本題となる。いみじくも “The Pleasures of Opium” と名付けられたセクションが始まるのだ。ところがその出だしから気になる点がないではない。というのはド・クインシーは、初めての阿片飲用の様子、つまり1804年の秋の出来事から語り出すからである。これがなぜ違和感を抱かせるかといえば、ひとつに、それ以前の物語に見出された語られる時期の連続性から推し量ると、次に取り上げられるのはグラスミア時代であろうと予想されるからである。しかしこの問題をここではそれ以上検討することはできない。一旦それは棚上げにして、物語構造の分析を続けよう。

過去に生じた事柄だけに注目するなら、“The Pleasures of Opium” はド・クインシーの初めての

阿片体験のみを語る。歯痛に始まり、頭、顔面へと及んだ痛みは耐えがたく、彼は友人の薦めに従い、ついに薬店で阿片を求める。場所はロンドン、1804年のことであった。またこのセクションは、その表題にもあるように、阿片のもたらす快楽に関する言及も含んでいる。そしてその箇所は、阿片についての“the alpha and the omega”(42)と自認する著者の面目躍如たる部分であり、というのも彼はそこで、阿片効果に関する世間の誤解を正そうとするからである。ところでここでは、そうした箇所さえも自伝の言説としての性格をはっきりと帯びていることに注目したい。たとえば、阿片の飲用後すぐにあらわれる状態が無気力状態ではないことの実例として、1800年代初頭のロンドン滞在中に彼が過ごした“an opium evening”(44)、つまりオペラハウスで音楽を堪能したこと、それから市場などでの貧しい人々との交遊などが紹介されているのである。またもっといえば、この阿片が快楽を与える経験自体、ド・クインシーには年代記的な意味がある。つまり彼においては、阿片の快楽は明確な始まりと終わりがあったのだ。これまでの語りは、その始まりを1804年と伝えていた。そしてその終わりは、次のセクションにおいて明らかになる。

“Introduction to the Pains of Opium”において最初に述べられるのは、1804年と1812年のあいだに起きた出来事である。彼は大学生活に自ら別れを告げ、そしてグラスミアに移り住む。伝記によれば、それぞれ1808年、1809年のことであった(Lindop 160, 184)。それから次に比較的詳細に紹介されるのは、1812年での彼の暮らしの様子である。それは、一言でいえば、“a scholar and a man of learned education, and in that sense a gentleman”(51)の生活であり、数年来続けられているドイツ形而上学の研究に彼は打ち込む。またその間、阿片飲用は続けていたが、彼は“a dilettante eater of opium”(52)、つまり常用者ではなかった。しかし既に作品の初めで教えられていたように、1813年、事情は一変し、彼は“a regular and confirmed opium-eater”(54)になり、そしてこの年、阿片が快楽をもたらす時期が終わるのである。ところがその三年後、彼に平安な時期が訪れる、もっともそれは“a parenthesis between years of a gloomier character”(55)でしかなかったのだが。その年は、阿片の飲用量は減り、研究も再開され、眠りは心地よく、また夢は訪れたとしても、穏やかなものだったという。そこまで語られてこのセクションは終わる。そして振り返れば、ここで語られていた出来事は二つの時代区分に及んでいたことがわかる。しかもその順序は、通例の自伝の約束通りに、より古い過去から説き起こされるものであり、そして論を先取りすると、次のセクションでもその手法は踏襲され、物語の最後には著者がこの作品を書いている現在へと至るのである。

1817年の中頃、上述した“the happiest year”(54)は終了する。このセクションの表題にもなっている、“The Pains of Opium”の年月が始まったのだ。意思の力は衰え、哲学の研究は停止されるばかりか、手紙の返事さえ書けない。それから問題の「苦痛」とは、彼自身、“I seemed every night to descend, not metaphorically, but literally to descend, into chasms and sunless abysses, depths below depths, from which it seemed hopeless that I could ever re-ascend”(68)と表現する、阿片夢がもたらすそれにほかならなかった。そして作品発表直後から多くの読者を魅了した、有名なGiambattista Piranesi 描く巨大な牢獄風のものも含め、幾つかの夢が具体的に紹介されるのだが、そ

こには夢を見た日付が記されているものもあり、そこから「苦痛」の時期が少なくとも1820年までは続いたことがわかる(76)。ところが物語にはさらに先があった。これまで自分が語ってきた「記録」について、そこでは阿片飲用者ではなく、阿片が“the true hero”(78)であり、目的はあくまでも、“the marvellous agency of opium, whether for pleasure or for pain”(78)を示すことにあったと述べた後、現在の己の様子が報告されるのである。かいつまんでいうと、今彼は阿片の飲用量を減らす努力を続けているが、体調はいまだ回復せず、そのため医学的治療を受けている。阿片の快楽は絶えて久しく、その続きは彼自身の言葉を聞くことにしよう。

One memorial of my former condition still remains: my dreams are not yet perfectly calm: the dread swell and agitation of the storm have not wholly subsided: the legions that encamped in them are drawing off, but not all departed: my sleep is still tumultuous, and, like the gates of Paradise to our first parents when looking back from afar, it is still (in the tremendous line of Milton)——

With dreadful faces throng'd and fiery arms. (80)

『阿片常用者の告白』は上の引用をもち終了する。そしてこの最終セクションでの物語構造については、それはグラスミア時代から現在へと展開するものであった。

そこで全体を振り返ると、作品の物語構造に関してどのようなことがいえるだろうか。まず先に保留しておいた違和感については、それは一種の構造上の断絶として理解できると思われる。その第一の根拠は、三つに分けられた時期の、時間軸上の連続、不連続という点にある。問題の部分、すなわち“Part II”から“The Pleasures of Opium”へと進むところ以外の箇所では、遡行するにせよ、より古い過去から説き下ろすにせよ、語りの展開は時間的に前後する時代区分間を行き来する、すなわちそこでは時間軸上での連続性が必ず保たれていた。しかし問題の部分では、不連続が、つまり時間軸を超えた語りの展開がみられたのである。また物語の内容においても、断絶の存在は容認されるだろう。大筋ではやはり“The Pleasures of Opium”から新たな物語が始まると考えられるのだ。それ以前では、ド・クインシーが阿片飲用に至るまでの経緯、あるいはその原因が述べられていた、換言すれば、彼が被った身体的心理的「苦しみ」の物語が語られていたのであり、一方後続の物語は、その快楽から苦痛へ、そしてそこからの脱却が希求される、阿片そのもの、ならびに阿片飲用に関する物語とまとめられると思われるのである。従って『阿片常用者の告白』は、その内部に断絶を擁すると判断できることから、都合二種類の物語構造を有しているといえる。そしてそれらは各々、以下のように図式化することが可能であろう。最初の構造についてはまず、著者がこの作品を書いている現在と、幼年期から大学時代までの時期を両端におき、そのあいだにグラスミア時代があるという構図が想定できる。そして物語は、一回きりではあるが、あたかも振り子の運動のように、一方の端を発

し、他方の端に至り、そしてそこから反転し、元の端へと戻っていく、しかもその往復運動は、往路にあっても帰路にあっても、同じ中間地点を通過する、といった具合に進行していたのである。それに対して後続の物語構造は、時間軸に沿ういわば直線的構造となっている。大学時代での初めての阿片体験から、グラスミア滞在中にその常用者になったこと、そして阿片の影響下にいまだある現在の己の様子へというように、実際に出来事が生起した順序通りに語られていたのである。よって『阿片常用者の告白』は、いわば振り子運動的構造に始まり、断絶を経て、直線的構造に至る、といった物語構造をもつと考えることができる。そして次に問いたいのは、そうした物語構造のもつ意味であるが、そこでワーズワスという人物がからんでくる。つまりかのロマン派詩人を物語の深層部分に重ねあわせるとき、上の二つの構造の各々が、そして断絶を挟みそれらが連続していること、すなわち作品の全体的な物語構造が、それぞれ意味を放ち始めるのである。

### III

『阿片常用者の告白』において、ワーズワスは直接的には全く言及されてはいない。<sup>1</sup> しかし強調するまでもなく、彼はド・クインシーの生涯において最も影響力のあった人物である。その点既に多くの証拠がある。たとえば John E. Jordan は以下の事柄を指摘する。ド・クインシーの作品群にはワーズワスの詩からの引用やアリュージョンが無数にみられ、そして特に自伝詩 *The Prelude* は、彼が『阿片常用者の告白』を構想、執筆するに際して、いわば一つの雛型の役割を果たした。具体的にはその詩は、一個の人間における過去と現在との関係性、人間心理に関する洞察などにおいて、彼を大いに助けたのであった (*De Quincey to Wordsworth* 357-62)。またそのほかに、“literature of knowledge” と “literature of power” の区別などといった、彼の文学批評の方法においても、詩人の思考を多く見出すことができるのである (Proctor 107-47; Devlin 22-67, 76-100)。しかし最も確かな証拠はド・クインシーの生そのものである。ワーズワスとの関係にのみ注目するだけでも、彼の生涯は概ね把握されるといっても過言ではない。ここではおよそ『阿片常用者の告白』が書き出される時点までの彼の半生を概観する。<sup>2</sup>

二人は元々似通った部分が少なくなかった。ともにジェントルマンである彼らは、社会的階層も教育程度もほぼ同じであり、詩や人間の心理への興味、自然の愛好といった点でも共通していた。しかしその性格あるいは気質は大きく異なり、ド・クインシーが “a critical mind”、“a penchant for ‘subtleties of all sorts and degrees’” をもっていたとすれば、ワーズワスのほうは、“a constructive mind” をもち、“a bias toward ‘the common growth of mother-earth’” (Jordan, *De Quincey to Wordsworth* 48-49) といった性向を有していたのである。そしてひとつにこの差異が、彼らの関係の行方に影響を及ぼすことになる。

ド・クインシーが初めてワーズワスのことを知ったのは、*Lyrical Ballads* (1798) を通してであった。1799年に彼はその詩集に会うのだが、その際受けた衝撃は強く、後に彼は『抒情歌謡集』を、

“an absolute revelation of untrodden worlds teeming with power and beauty as yet unsuspected amongst men” (*Autobiography* 139) と評し、その読書体験を、“the greatest event in the unfolding of my own mind” (*Autobiography* 138) と述べたほどであった。その時点からワーズワスは、Samuel Taylor Coleridge を第二位に従え、少年ド・クインシーの最大の崇拜対象となる。そして “a religious feeling” (*London Reminiscences* 41) にも似たその熱情は、1800年、マンチェスター・グラマースクール入学後も弱まることはなかった。『阿片常用者の告白』においても暗示されているように、その学校を脱走し、まず赴こうとしていた行き先が、彼ら詩人の住む場所にほかならなかったのだ(11)。そして1803年、心情はいよいよ行動となる。当時の彼の日記によれば、ド・クインシーにとりワーズワスは古今の英国詩人のうちでも特に重要であり、それから自分がその詩作品の価値を十分理解していることに、彼は優越感を感じてもいる (Eaton 94; Lyon 38-39)。そして英雄崇拜は自身をも触発し、彼はその頃幾度目かの詩作を試みたりもするが、ついに同年5月、草稿を重ねた手紙を詩人に送る。そしてこれを機に二人のあいだに友情が芽生えるのであった。

しかし彼らが直接見えるまで、さらに数年を要した。その間のド・クインシーの振舞いは、まぎれもなく崇拜者のそれである。1805年と1806年の二回、彼はグラスミアの地を踏むが、どちらの場合もいざ会見となると怯んでしまった。そして記念すべき出会いは、1807年11月4日のことであった。その後二人の関係は急速に深まり、共同作業を行うまでに発展する。1808年の冬、ワーズワスは半島戦争をめぐる政治パンフレット、*Convention of Cintra* を執筆するが、その出版にあたりド・クインシーは、翌年2月、校訂を含む印刷作業全般の監督者として、使命感に満ちロンドンに赴くのである。しかしもうこの頃から二人の関係に陰りが見え始める。例のパンフレットは5月に入りようやく出版されたのだが、その遅れの原因をド・クインシーに帰する雰囲気はグラスミアには広がっていた。それと平行して、彼自身の心にも変化が生じてくる。その様子は、Judson S. Lyon の表現を借りると、“Now growing less content to be a mere appendage or satellite of his two former heroes, De Quincey was beginning to aspire toward being accepted as an equal—as a man whose intellectual powers entitled him to respect”(51) といったものであった。つまり彼は、依然として子供扱いを止めない詩人たちに対し、不満を募らせていくのである。

1809年は上の事柄以外でも重要な年であった。ド・クインシーはその年の秋、ダヴ・コテージに移住し、少なくとも外見上は詩人のサークルの歴とした一員となる。その後しばらくは二人の友情は維持されるが、それは1813年までのことだった。不和の徴候だけなら、1812年に既にあらわれていた。その年、ド・クインシーが特に可愛がっていた詩人の娘、Catherine が3歳で病死する。彼の悲しみのほどは父親のそれを凌駕するばかりか、周囲には異常とさえ映るくらいであり、そこに二人のあいだの気質の違いが露呈する (Thron 559-67)。そして翌年の彼の行動は、詩人とその周囲の人々から反感を買うたぐいのものでしかなかった。1804年来の阿片飲用は、先年のキャサリンの死がもたらした大きな悲しみが一つの原因となり、その量が増し、1813年には彼は文字通りの常用者となる。それに気付いたワーズワスたちは嫌悪感を露骨に示す。またほぼ同じ頃、ライダル・ウォーターに住む農夫シ



ンプソンの娘、マーガレットとド・クインシーは恋仲になるが、詩人らはこれにも、二人の身分の相違を理由に、失望をあらわにした。一方ド・クインシーのほうでも、師弟関係以上のものを望まない詩人の傲慢さに我慢できなくなり、それからマーガレットに対する彼らの態度への反感も手伝って、結果的にお互いのあいだに歴然とした距離が生まれる。そして決定的だったのは、1817年、マーガレットの出産、そして二人の結婚であった。翌年ド・クインシーは、地元の議員選挙にあたりワーズワスを大いに助け、またそれを契機に、詩人の口添えで、*The Westmorland Gazette* の編集者の地位を得、詩人は詩人でその雑誌に寄稿するなど、二人の関係は修復するかにみえたが、元通りにはならなかった。1819年、その雑誌から手を引いて以降、ド・クインシーはグラスミアを留守がちになり、彼がその頃自分の職業として確立しつつあった文筆家としての主な活動の場は、エディンバラやロンドンへと移っていく。そして1821年の秋、*The London Magazine* 誌上に発表された『阿片常用者の告白』は、そのような境遇のなか、首都において執筆されたのであった。

簡潔にいうと、二人の間柄は、崇拜者とその英雄の関係に始まり、友情を経て、最終的には、双方に対する幻滅から疎遠に至るというものであった。そしてここにおいて、ワーズワスと『阿片常用者の告白』の物語構造との関係性を考えることができるのだ。まず着目するのは、グラスミアという場所である。ド・クインシーにとりその地は重要な意義をもっていた。なかんずくそこが彼の英雄の居場所だったことがその理由であるが、なお目を引くのは、彼の生そのものが、その谷をめぐる、もっといえばその地を中心とする、移動行為以外のなにもものでもないという点である。『抒情歌謡集』に出会ってからの彼の半生は、その場所に憧れ、そこに住み着き、そしてそこを離れるという過程でしかないのだ。その限りにおいてグラスミアは、ワーズワスという彼の生を構成する重要な一つの要素に根差す意義に満たされていたといえる。そしてこうしたグラスミアの位置とその意味が、詩人にまつわるド・クインシーの伝記的事実と『阿片常用者の告白』の物語構造とを結び付けるのだ。先章で指摘したように、この作品は二種類の物語構造から構成されていたのだが、そのうち振り子運動的と名付けた最初の構造にあっては、物語の進行は必ずある中点を通過していた、つまりグラスミア時代の事柄が繰り返し言及されていたのであり、よってその地はその物語構造のなかで中心的な意義を有していたといえる。一方それに続く直線的な物語構造においては、上のような言い方をまねると、グラスミアは逆にそこから脱出されるべき地にほかならなかったことから、そこではその場所は周縁化されようとしていたことが読み取れるのである。それぞれ言い換えれば、前者はグラスミアを中心とする物語構造であり、後者はその谷が価値の下落を強いられようとしている物語構造であったとなるだろう。そしてこうした作品の深層での内実が、ワーズワスとド・クインシーの関係の歴史と照応するのだ。つまりグラスミアという地を仲立ちに、あるいは軸として、振り子運動的構造は、詩人に対する英雄視から始まり、ついにその心情が高じてその谷へ移住するという過程、すなわちド・クインシーの精神と生活の中心にワーズワスが存在したという事実と照応し、一方直線的構造は、詩人とのあいだに生じた不信感から、文字通り彼の元から離れていくという結末、つまり自らの内的外的な世界から詩人を排除しようとしたド・クインシーの意思と呼応するのだ。そしてさらに、こうした理解をふ

まえると、作品にみられるそれら二種類の構造の順序、つまり振り子運動的構造から直線的構造へという進行からは、次のことが読み取れるだろう。要点は、直線的構造が後置されて作品が終わるという事実である。すなわちド・クインシーはこの作品において、グラスミアの脱中心化、言い換えれば、その地がもつ意義の剝奪をはかろうとしているのであり、従って俯瞰すると、そのようにグラスミアにまつわる己の半生をいわば象徴的に語るその作品は、端的には著者自身による詩人からの独立宣言と読めるのである。

それからなおも興味深いことに、ド・クインシーとワーズワスの物語はまた、『阿片常用者の告白』において直接聞き取れた阿片に関する物語と、なんら摩擦することなく、いやむしろ有機的に関係していると考えられるのだ。そしてこの場合でも、グラスミアが結節点として働いているのである。作品が伝える彼の阿片体験の経緯については先章でおおよそ述べた。そしてそれもまた、グラスミアという地を用いて捉え直すことができる。重要なのは、彼が阿片常用者になった場所が正しくその谷であったことである。つまりグラスミアとは、阿片という、ド・クインシーの生を形作るもう一つの明白な要素によっても意義を充填されていたのであり、とすると、彼が阿片常用者になるまでの過程は、その伝記が教えていた、彼がその谷に居住するまでの経緯と、それからそうした薬剤漬けの境遇から脱しようとするのは、その地から離れ行くことと照応することになる。そしてこうした彼の阿片体験の歴史は作品の物語構造と明瞭に響きあうのだ。つまり振り子運動的構造は、グラスミアを核とする生活、すなわち彼が阿片常用者であることと、対する直線的構造は、その地からの脱出をはかること、すなわち阿片を絶とうとする努力と結び付き、それから物語の全体的な構造は、その効果も含む阿片の呪縛から完全に脱しようとする彼の意思と合致するのだ。そして正にこの限りにおいて、ワーズワスをめぐるド・クインシーの生は、阿片をめぐるその生と並行関係にあるといえるのである。彼にとりワーズワスと阿片は、グラスミアを軸に、すなわちそこへ至り、そこに留まり、そこから脱するという構造上の経緯において、照応するのである。また逆の捉え方をすれば、彼の半生においてその谷は、彼のワーズワスとの関係においてばかりでなく、阿片経験においても意義深い場所であったとなる。そして畢竟、ド・クインシーの半生とは、詩人との関係、および阿片飲用との関係の双方において、その地に収斂し、そしてそこを離れようとする過程であったのだ。その場所で彼はワーズワスと友情を確立し、それから常用化というかたちで、阿片との関係も強固にし、そして後にそれらの解消をねらうのだ。このような点でグラスミアは、彼の生にあって文字通り中心的な位置にあったと考えられるのである。

#### IV

『阿片常用者の告白』は著者ド・クインシーの阿片体験のみを語るのではない。それは、彼の生を貫通すると同時に特徴付けていた二つの要素、すなわちワーズワスと阿片のそれぞれが彼自身と結んでいた関係性を、独特の物語構造を通じて雄弁に照出していたことにおいて、彼の半生についても語っ

ていたのである。その意味でこの作品は間違いなく自伝、それも従来の理解以上に広い射程を有していた自伝であったのだ。そしてその自伝の中心はグラスミアという場所だったのである。そこで議論をさらに発展させ、ド・クインシーが作品中にワーズワスに関する記述を一切組み入れなかったこと、そしてそのようなかたちで発表したことの真意を探るなら、やはりそこにも、詩人から逃れようとする彼の意思を容易に読み取ることができる (Rzepka 180-85)。要するにかつての英雄をそのように扱うことで、彼は自らの半生をいわば公的に改訂しようとしたのだ。なお伝記が示すところでは、その作品の発表後の彼の主な居場所はやはり、必ずしもグラスミアというわけではなく、そして1830年も終わる頃には、その谷を完全に後にし、エディンバラへと移るのである (Lindop 252-98)。

しかしそれからの彼の様子を見ると、そうした『阿片常用者の告白』に発していたと思しい独り立ちへのベクトルは、ド・クインシーのねらい通りの結果を生んだとは決して言い切れないのである。まずその作品以降の作家活動から、彼にはその後も依然として、詩人が己の生の主たる構成要素であり続けたことが明らかである。1830年以降、ワーズワスとの関係は事実上解消されたとはいえ、ド・クインシーはそれ以後も彼やその詩作品を様々な機会に取り上げ、さらに1839年には詩人自身が題材となる、つまりワーズワスに関する伝記的批評を書き上げるのだ (Jordan, *Thomas De Quincey* 143-53; Cafarelli 121-47)。また同様にド・クインシーが絶縁を望んでいた阿片についても、それを絶つ努力は幾度もなされたが、結局実現しないまま彼は世を去った (Lindop 386)。とするならば、『阿片常用者の告白』は、ド・クインシーの生にあって、その過去を形作っていたばかりでなく、現在の彼の状況も規定し、そしてさらに未来のそれをも形成し続けていくことになる、二つの要素を描き出していたといえるだろう。それから彼の未来も形成するという点では、その作品自体も同様の働きをしていたと考えられる。それ以降彼は文字通り様々な種類の作品を量産していくのだが、1856年に公にされた『阿片常用者の告白』の改訂版はもちろん、たとえば、1834年から始められ、1850年代初頭まで続けられた、いわゆる *Autobiographical Sketches* や、1845年の *Suspiria de Profundis*、それから1838年発表の小説、“The Household Wreck”、そして1834年以来、主に *Tait's Edinburgh Magazine* に掲載された、先述のワーズワスのものを含む、コールリッジら湖水地方にまつわる人々を題材にした記事というように、彼の後の作品の多くは『阿片常用者の告白』に接続するものであった。つまりそれらは、1821年の自伝ではふれられなかった己の過去を伝えるか、またはそこで語られていた事柄のいわば補遺、要するに広義の自伝にほかならなかったのである (Japp 253-54; Lyon 87-91, 146-47; Baxter 1-185)。その点『阿片常用者の告白』は明らかに、彼の他の作品群に対して始まりであったばかりか、その中心であり続けたということができよう。

そして最後に、ド・クインシーは別のかたちでも、阿片とワーズワスに対して同様の関係を結んでいたことを指摘しておこう。それは一言でいえば、彼はどちらにも知悉していたというものである。先に述べたように『阿片常用者の告白』を通じて彼は、阿片について一般の人々が抱いている理解の修正を試み、そして彼の見解は実際、医学界が注目するほどのものでもあったのだが (Abrams 6-7; Schneider 28-30)、それが可能だったのも、彼が、実体験に基づく阿片に関する豊かで確実な知識を

有していたからである。それから文学批評家ド・クインシーは、時代に先駆けること30年ほど前から、ワーズワスの詩人としての力量を見抜き、その詩作品を高く評価していたことを繰り返し言い立てていた。<sup>3</sup> このように彼はどちらの場合でも、世人の追随を許さぬ権威者だったのだが、しかし彼の生全般を振り返るとき、そのことは果たして、単なる一つの当然といえば当然の帰結でしかないのか、それとも第一級の皮肉的な展開であるのか、容易には答えられない。ただ確実にいえるのは、ド・クインシーの生は、ワーズワスならびに阿片と不可分の関係にあったということ、そして彼の主著『阿片常用者の告白』は、グラスミアを中心とする物語構造というかたちで、そのことを体現していたということである。

### 注

- 1 ただしこの作品においてワーズワスは、いわば間接的には言及されているといえる。たとえば、本文第二章でふれたように、ロンドン滞在中にド・クインシーはグラスミアに憧れたこと、また本章で後にみるように、グラマースクールを脱走しての行き先が当初、その谷であったことなどがそれである。どちらの場合も、その地が選ばれていたのは、そこがワーズワスの居住する場所だったからにはほかならず、その限りで『阿片常用者の告白』ではその詩人について暗に述べられていたことになる。
- 2 以下のド・クインシーとワーズワスの関係の歴史については、Japp 84-186; Eaton 57-291; Wells 1080-128; Jordan, *De Quincey to Wordsworth* 1-333; Sackville-West 36-185; Lindop 23-263; そして Russett 14-91に負う。
- 3 この点については、Lyon 38ならびに Devlin 16を参照。またド・クインシー自身の言葉からの具体例としては、*Autobiography* 59-61, 138-39; *London Reminiscences* 36; *Recollections* 116などを参照。

### 引用文献

- Abrams, M.H. *The Milk of Paradise: The Effect of Opium Visions on the Works of De Quincey, Crabbe, Francis Thompson, and Coleridge*. 1934. New York: Octagon, 1971.
- Baxter, Edmund. *De Quincey's Art of Autobiography*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1990.
- Berridge, Virginia. "Victorian Opium Eating: Responses to Opiate Use in Nineteenth-Century England." *Victorian Studies* 21 (1978): 437-61.
- Cafarelli, Annette Wheeler. "De Quincey and Wordsworthian Narrative." *Studies in Romanticism* 28 (1989): 121-47.
- Clej, Alina. *A Genealogy of the Modern Self: Thomas De Quincey and the Intoxication of Writing*. Stanford: Stanford UP, 1995.
- De Quincey, Thomas. *Autobiography and Literary Reminiscences*. Masson vol. 2.
- . *Confessions of an English Opium-Eater and Other Writings*. Ed. Grevel Lindop. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *London Reminiscences*. Masson vol. 3. 13-206.
- . *Recollections of the Lakes and the Lake Poets*. 1970. Ed. David Wright. Harmondsworth: Penguin, 1988.
- Devlin, D.D. *De Quincey, Wordsworth and the Art of Prose*. London: Macmillan, 1983.

- Eaton, Horace Ainsworth. *Thomas De Quincey : A Biography*. New York : Oxford UP, 1936.
- Hayter, Alethea. *Opium and the Romantic Imagination*. 1968. Berkeley : U of California P, 1970.
- Japp, Alexander H. *Thomas De Quincey : His Life and Writings. With Unpublished Correspondence*. Rev. ed. London : John Hogg, 1890.
- Jordan, John E. *De Quincey to Wordsworth : A Biography of a Relationship. With the Letters of Thomas De Quincey to the Wordsworth Family*. Berkeley : U of California P, 1962.
- . *Thomas De Quincey, Literary Critic : His Method and Achievement*. Berkeley : U of California P, 1952.
- Lindop, Grevel. *The Opium-Eater : A Life of Thomas De Quincey*. London : Dent, 1981.
- Lomax, Elizabeth. "The Uses and Abuses of Opiates in Nineteenth-Century England." *Bulletin of the History of Medicine* 47 (1973) : 167-76.
- Lyon, Judson S. *Thomas De Quincey*. Twayne's English Authors Ser. 83. New York : Twayne, 1969.
- Masson, David, ed. *The Collected Writings of Thomas De Quincey*. 14 vols. Edinburgh : Adam and Charles Black, 1889-90.
- McDonagh, Josephine. *De Quincey's Disciplines*. Oxford : Clarendon P, 1994.
- Proctor, Sigmund K. *Thomas De Quincey's Theory of Literature*. Language and Literature 19. 1943. New York : Octagon, 1966.
- Russett, Margaret. *De Quincey's Romanticism : Canonical Minority and the Forms of Transmission*. Cambridge Studies in Romanticism 25. Cambridge : Cambridge UP, 1997.
- Rzepka, Charles. "De Quincey and the Malay : Dove Cottage Idolatry." *The Wordsworth Circle* 24 (1993) : 180-85.
- Sackville-West, Edward. *A Flame in Sunlight : The Life and Work of Thomas De Quincey*. New ed. by John E. Jordan. London : Bodley Head, 1974.
- Schneider, Elisabeth. *Coleridge, Opium and Kubla Khan*. 1953. New York : Octagon, 1983.
- Thron, E. Michael. "The Significance of Catherine Wordsworth's Death to Thomas De Quincey and William Wordsworth." *SEL* 28 (1988) : 559-67.
- Wells, John Edwin. "Wordsworth and De Quincey in Westmorland Politics, 1818." *PMLA* 55 (1940) : 1080-128.